

## 春陽会誕生 100年 それぞれの闘い

### 岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ

東京ステーションギャラリー(東京駅) 23.09.16~11.12  
栃木県立美術館、長野県立美術館、愛知・碧南市美術館 24年巡回

「春陽会」は、1922年に画家の志向を尊重し自由な活動を許容する団体として「岸田劉生」らを中心とするメンバーとして発足し、画風は形式に左右されず、大衆に訴えかけようという自由さが、油彩だけでなく素描、挿絵、版画などの出品につながり、毎年、「展覧会」が継続されて100年が経過しているが、本展は、これまでの展開を追いつつ創立から1950年代の春陽会主品作を含めた代表作など「約100点」を紹介している。



岸田劉生 《麗子弾弦図(れいこだんげんず)》 1923年

画伯の愛娘・麗子が三味線を弾く姿を描いたもので、子供の身体には少し大き目の三味線を構え、右手はしっかりと撥を握り、小さな左手の細い指先は勘所(かんどころ)を押さえている。台上には「黒髪」とタイトルの書かれた歌詞が置かれ、口元が少し動いているように見られる。

岡鹿之助 《山麓》 1957年 油彩/カンバス

モチーフは、建物が寒色系で描かれ、構図上では手前に排水路を設定するなど変化が工夫されている作品は、あくまでも画伯の形体に対する興味とされる。山間のひっそりしたたずまいに、安全管理を祈願する緑の十字を描いた旗がひるがえっているのがとても印象的である。